

2007 年度 小委員会活動成果報告

(2008 年 2 月 14 日作成)

小委員会名	湿気小委員会	主 査 名：銚井修一 就任年月：2005 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学本委員会 (熱環境運営委員会)	委員長名：井上 勝夫 主 査 名：銚井 修一
設 置 期 間	2005 年 4 月 ~ 2009 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>・湿気関連分野の研究者数、研究発表件数は小委員会規模にまで増加しており、また日本独自の研究テーマ・成果も多くこれらの進展と継承を図ることが基本的な目標である。具体的な目標は次の 2 項目である。</p> <p>・未解決重要テーマについて討議するため WG 設置を計画する。</p> <p>・今後の湿気研究を見据えて、「熱シンポジウム」の開催に向けての検討を行う。</p>	
委員構成 (委員名(所属))	<p>委員公募の有無：有(2名)</p> <p>池田哲朗(近畿大学) 岩前篤(近畿大学) 銚井修一(京都大学) 小椋大輔(京都大学) 尾崎明仁(京都府立大学) 坂本雄三(東京大学) 佐藤真奈美(大阪工業大学) 鈴木大隆(北海道立北方建築総合研究所) 本間義規(岩手県立大学) 荒井良延(鹿島建設) 高田暁(神戸大学) 永井久也(三重大学) 水谷章夫(名古屋工業大学) 土屋喬雄(東洋大学) 岸本嘉彦(北海道大学)</p>	
設置 WG (WG 名：目的)	<p>吸放湿材の利用 WG：吸放湿材に関わる項目の整理、現在の研究の整理、吸放湿材の評価・利用に関わる問題の検討と整理</p> <p>建物の「湿害」評価 WG：湿害の調査・分類、被害発生メカニズム検討、湿害分類のキーワード・評価指標の検討、「湿害」の予測・防止法の検討</p> <p>熱物質移動シミュレーション WG：ベンチマークテストの実施、実験結果との対応、計算結果同士の比較、定量的評価手法の整理</p> <p>ダメージファンクション WG：木材、金属材料など代表的な建築材料を対象に、環境条件が材料物性に及ぼす影響を把握、各材料毎の劣化関数等の開発</p> <p>建築全体の温湿度環境の予測・評価 WG：建築全体(空間および壁体内部)の温湿度挙動の予測・評価方法について検討</p>	
2007 年度予算	170,000 円	ホームページ公開の有無：無 委員会 HP アドレス：

項 目	自己評価
委員会開催数	各 WG における委員会回数は、計 20 回(年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等)	
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	<p>1. 湿気関連の諸問題の整理とその解決に向けて、小委員会および WG を開催するとともに、メーリングリストを利用して意見交換を行った。</p> <p>2. 5 WG とも活発に WG を開催した。またこれらを積極的に支援した。</p> <p>3. WG の活動結果の公表を支援した。</p>
委員会活動の問題点・課題	<p>1. 経費削減および意見交換の時間確保のため電子会議による委員会を数回実施したが、参加者個々のインターネット接続環境の違いにより若干困難な状況が生じた。</p> <p>2. ホームページを開設したいが、適切な人材・経費の確保が難しい。</p> <p>3.</p>

* 小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

* 中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

2007 年度 小委員会活動 自己評価

(中間年度評価)

総合評価 (4段階評価)	A	B	C	D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p>1. 第35回熱シンポジウム「湿気研究の実用的展開」を2005年度に開催した。参加者数は115名であり、それまでの各WGの活動成果を会員に還元するとともに、多くのご意見・コメントを伺い、今後の活動のための重要な基礎資料を得ることができた。</p> <p>2. 科学研究費 一般(C) 課題番号19560601 の補助を受け、最終消費者の「湿害」に関する意識調査を、北海道、東北、関東、関西、九州の5地区において実施した。調査票データの評価とまとめについては、2008年度に実施を予定している。なお、技術者・研究者側の湿害定義の基礎資料である実例収集と定義化の検討については、現在継続中である。</p> <p>3. 吸放湿材利用による効果について、既往研究のレビューとこれまで得られている成果の整理を行い、吸放湿材利用による効果をみるための標準問題について継続的に検討を行っている。</p> <p>4. 建築全体の温湿度環境を予測・評価するため、熱・水分・空気移動に関する数理モデルの整理、各現象を予測するためのプログラム・モジュールの作成、それらを連成させる基本計算フローについて検討した。</p> <p>5. ベンチマークテストを実施するとともに、アカデミックスタンダード化の検討を行った。</p> <p>以上のように、熱シンポジウムを通して活動成果を会員に還元するとともに、外部資金(科研費)を獲得し積極的に全国的な調査研究を行った。また、まだ見える形での成果には到っていないが、標準問題の作成、シミュレーションモデルの作成、ベンチマークテストの実施、アカスタ作成などのための基礎的な検討・活動を継続的に行っている。ただ、WG活動として十分にできていない面もあり、B判定と自己評価した。</p>			

- 総合評価は4段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価(シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など)に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。